視点

今を生きるための「古典」ＡＬで「面白さ」を発見する

●インタビュー
平野多恵　成蹊大学文学部教授

ひらのたえ● 1973 年富山県生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。博士（文学）。十文字学園女子大学短期大学部准教授を経て、現在、成蹊大学文学部教授。日本中世文学、おみくじや和歌占いの文化史、アクティブラーニングによる古典教育の実践を研究。著書に『明恵　和歌と仏教の相克』（笠間書院）など。

高校に先立つ形で、大学で徐々に広がりを見せている、アクティブラーニング（ＡＬ）。大学での取り組みは、高校でのＡＬを設計する上で大きな示唆となる。今回は日本の古典文学でのＡＬについて、成蹊大学文学部・平野多恵教授にうかがった。

ライフスキル教育を根底に

――ＡＬを始めたきっかけを。

平野　私は２００５年に十文字学園女子大学短期大学部の国語国文専攻に着任しました。08年から就職担当の委員となり、毎年、一学年80人余の学生と面接し、履歴書やエントリーシートの添削などをしていました。

08年はリーマンショックで新卒就職が急激に悪化し、短大生もその状況に直面した年です。短大は2年間の短い期間ですので、サークル活動やアルバイトについての経験はそれほどありません。専門の日本語や日本文学についてもなかなか書けず、学生は苦労していました。

短大に来る求人には、販売職など、コミュニケーション能力が求められる職種が多くなっています。ところが読書は好きでも人と話すのは苦手という学生もいて、学生たちの今後に強い危機感を抱きました。

短大ではキャリア教育の授業を外部講師に委託して週一で開講していました。学生に混じってその授業を聴講するうち、このような教育は専任教員が日々の授業の中でやったほうがいいと、考えるようになったんです。

そこで10年度から初年次教育の一環として、1年次の必修科目「基礎講読」に「ライフスキル教育」を導入しました。ライフスキルはＷＨＯ（世界保健機構）によれば「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」であり、学習指導要領の「生きる力」や、「社会人基礎力」に重なります。

ほとんどの短大教員にとって、ライフスキル教育は専門外です。「なぜ教員がそこまで……」との声もありましたが、専任教員全員がライオンズクエストの「ライフスキル教育」の研修に参加し、「自己紹介」「他己紹介」「情報検索や図書館の利用方法」「傾聴力を学ぶ」などのカリキュラムを組みました。

プロジェクト学習で「主体性」

――ご専門の古典文学のＡＬは？

平野　参加型の授業を始めたのは着任してすぐです。一コマ90分の授業に板書と講義だけで短大生の興味を持続させるのは、大変なことでした。授業を少しでも活性化させるため、例えば導入で「今回学ぶ内容と関連のある質問」に答えてもらうようにしたところ、学生は最後まで授業に関心を持ち続けるようになりました。後にＡＬのワークショップに参加し、「あれはＡＬだった」と気づいたんです。

――古典でＡＬ向きの題材は？

平野　①正解が一つではなく、多様な解釈ができるもの　②古典文学の世界に〈参加〉できるもの　③作品の内容に「共感」できるもの　④現代と異なる価値観を含むもの　⑤作品の理解が深まる問いを含むもの　などが考えられます。

例えば『今昔物語集』における「表題」と「話末評語（説話末尾の編者によるコメント）」を考えさせる、などがあります。まず課題文を読み、ワークシートに記入してから、グループで表題と話末評語を話し合って発表し、最後にコメントシートで振り返る――という流れです。重要なのはワークシートの設計で、これがうまくできていればワークが円滑に進みます。

――ＡＬで身につく力は？

平野　まずグループやペアワークによる「コミュニケーション力」です。また文章にまとめて発表する中で「表現力」も身につきます。もちろんテキストの読解やワークで「思考力」「理解力」も深まります。さらに他者への「想像力」や「許容力」、そして昔の人の考えを踏まえて、新しいものを作り出す「創造力」など、多面的な力が養えます。

――13年から大学にご勤務ですね。

平野　学生たちは刺激を与えると驚くほど反応してくれます。学生アンケートなどでも、ＡＬ型授業で「コミュニケーション能力」は高まっているとの回答が多いです。ただ、「主体性」は育て方が難しい。

そこで行っているのが、外部の人と関わる、プロジェクト型授業です。例えばその一つが、ゼミ生が学園祭で出展している「歌占」。歌占とは、和歌による占いで、本来はシャーマンである巫女が人々の求めに応じて神がかりしてお告げの「和歌」を詠み出すものでした。学生は、来場者の話を聞きつつ、実にわかりやすく和歌を解説します。他にも、学生が自ら企画したものとして、「御伽草子キャラクター診断」などもあります。

こうした機会を通して、例えばリーダーを任された学生が「人の話をまとめるのがうまいこと」に気付くなど、自分の適性を発見してほしいのです。

――「古典の授業」のイメージが、大きく変わりますね。

平野　古典は「コンテンツの宝庫」です。もちろん、古文を自力で理解できるようになってほしいですが、それ以前に「古典は面白い」と感じることが大切です。特に「今を生きるための古典」という視点は重要ですね。

――雰囲気づくりが大事ですね。

平野　最初の授業でクラスの「空気づくり」のため、必ず「この授業はこういうことをやるよ」「こんなふうに隣の人と話すんだよ」と伝えます。また、「社会では好きな人とばかりでなく、誰とでもコミュニケーションする必要がある。大学の授業もそういう場所」とも話します。

学校は学生が失敗を許される、恵まれた「特別な場所」です。その「特別な場所」で人と関わる練習を重ねていくことが大事なんです。ただ、中には他人と比べて落ち込む学生もいますので、「過去の自分と比べるように」と伝えています。

作品の「本質」を問う

――「対話」の質を上げるには？

平野　一つは「聞く力、傾聴力」。傾聴力の話は学生にとても好評

です。「相手の目を見る」「うなずく」など基本の姿勢も話しますが、最も大切なのは、相手に関心を持つこと。また、学生たちが一生懸命、耳を傾けてくれることで、「教員も刺激を受けて、高いパフォーマンスを出せる」など、聞き手の姿勢が、話し手に与える影響も押さえていきます。

そして授業の最後には必ず「コメントシート」を書かせています。「良い質問」があれば、必ず紹介するようにしています。

――良い質問とは？

平野　文学でいえば、作品の背景や読解などの本質を問うものです。例えば「浦島太郎」の話で考えてみます。私たちが知っている「浦島太郎」の結末は、「竜宮城から帰ってきた浦島太郎が玉手箱を開けると白髪の老人になってしまう」というものです。これは明治時代の児童文学者の巌谷小波による、『日本昔噺「浦島太郎」』に基づいています。

それに対して室町時代から江戸時代にかけて広く読まれた御伽草子の「浦島太郎」は、玉手箱を開けて老人になった浦島太郎が、そののちに鶴となり、太郎が助けた亀（実は乙姫）と共に夫婦の明神になり、めでたし……というお話です。

二つを比べ、「なぜ結末に違いがあるのか」「どう時代が変化したのか」などは「本質的なことに関わる質問」になりますね。

室町時代の「浦島太郎」からは、当時の神様への信仰や人々の長寿への願望が読み取れます。さらに助けた亀を放してやったおかげで竜宮城に行けるという点は、動物報恩譚（動物の恩返し）における、「放生と報恩」であり、仏教的な要素も濃厚です。

それに対して明治以降の「浦島太郎」は、「子ども向け」に書かれています。宗教的な要素を取り除いて「約束を破ってはいけない」という教訓的な要素を強調しています。これは当時の教育政策と深く関わっています。

このように、「時代の価値観をつかむこと」は、古典から学ぶべきことの一つですね。

始まった、大学と高校の連携

――「古典でのＡＬ」は、大学で広がりつつありますか？

平野　全般的には「これから」ですが、私は13年に大学院で同世代だった人たちと、「日本文学アクティブラーニング研究会」を立ち上げました。学生たちの現状に「危機感」を感じている大学人が中心となっています。

ベースには「世代の問題」があると思います。私たちは団塊ジュニア世代で、入試が厳しい上に就職は超氷河期でした。高校時代の友人の中には今でも非正規雇用だったり、転職がうまくいかなかったり……と様々な人がいます。こうした時代背景もあり、専門教育の中でこそ、キャリア教育を行う必要があると感じている人が多いんです。

私たちは年に2～3回、自分たちが行っている授業の情報交換や、学生参加型ワークショップを行っています。昨年は神奈川の高校の先生も参加されましたが、いずれは高校の先生方とも協力して、日本文学に関するＡＬ型授業のテキストを作れたら、と考えています。

――高校古典のＡＬの注意点を。

平野　先ほど挙げた、「大学で古典文学を学ぶＡＬの条件」とともに、「できるだけ敷居を低くすること」が大事だと思います。「私にはわからない」となると、興味が持てなくなるからです。

●アクティブラーニングのための古典の素材案

①『伊勢物語』９段「東下り」の和歌「唐衣きつつなれにし…」 →折句で文章作りを導入に「かきつばた」折句解説、連想ゲームを導入に縁語の解説
②『枕草子』106段「２月のつごもりごろに」清少納言と藤原公任の掛け合い →公任の「少し春ある心地こそすれ」に五七五で句を付ける。
③百人一首を素材にパロディづくり 例：明けぬれ は 暮るる ものとは知りながら　なほ恨めしき 朝ぼらけかな →［　　］の部分を空欄にして当てはまる表現を考える
④説話の話末を空欄にしてコメントを考える →：『古今著聞集』巻8-319「刑部卿敦兼と北の方」の話末、「優なる北の方の心なるべし」と生徒のコメントを比較して、当時の価値観を知る。
⑤『徒然草』190段「妻といふものこそ」 →結婚の是非についてグループで議論した上で、兼好の意見について考える

『歌占カード』猫づくし
（平野多恵著　夜間飛行刊）
平安時代から江戸時代までの和歌占の伝統を踏まえた32首によるカード。丁寧な解説を収録。

ゼミ生の教育実習を毎年参観するのですが、学生は経験が少ないので「わざわざそこを聞かなくても……」というところでワークを行いがちです。やはり「何を大事とするのか」「意見交換をして意義のあるものは何か」「視野が広がる題材は何か」という視点が大事です。

――講義とＡＬの切り分けは？

平野　生徒のレベルにもよりますが、古典文法や古典常識などは、アウトプットでＡＬを活用できます。人に説明することは一番の定着になりますから。また指定範囲を予習させ、授業で質問したり、演習で間違ったところを意見交換したり、反転学習も効果がありますね。

グローバル時代だからこそ

――平野先生ご自身の大学時代についてお話しください。

平野　大学でインドに興味が湧き、あるサークルに入ったんです。そこにいる人はみな、人生や日本の将来を真剣に考えていました。90年代前半はバブルの残り香もあり、真面目な人ほど大学に居場所が無かったのだと思います。後からそのサークルがオウム真理教のダミーサークルだと聞かされました。私は入信せずに済みましたが、あの時代の経験から、「大学に学生たちの居場所を作りたい」という思いを、ずっと持ち続けています。

その後何度もインドに渡り、「生きる手応え」を感じつつ、「生と死」に関心を持つようになりました。こうしたテーマを扱うのは中世文学だということで行きついたのが、インド巡礼を熱望した明恵上人の研究です。

――こうしたお話を聞くと、文学を学びたくなります。しかし世の中では「文学部への逆風」も吹いています。

平野　確かに学生たちは就職活動などで、「何で文学部なの？」と、聞かれるようです。

でもよく考えてみると、高等教育で学ぶのは、「たくさんの情報を整理分類して、そこから重要な題材を選び出し、それらを論理的に分析して伝えていくこと」で、どの学部でも変わりありません。ならば好きなことを学んだほうがいいですよね。

文学部では文学はもちろん、心や思想、歴史、人間に関するあらゆることが学べます。古文献から当時の医学を研究している人もいます。特に当時の原典を直接調べられるのは、日本の古典研究の醍醐味です。

――グローバル化の中での「古典」の意味もありますね。

平野　日本人は外国では「日本のことを知っている」のが当たり前と見られます。だからこそ、海外で活躍する人に日本文学をもっと学んでほしい。私たちも戦略的に考える必要があります。

――文学、古典で身につく力は？

平野　文学部で学ぶ力は、流行を追う、即効性のあるものではない。効き目は遅いけれど、持続力のある力や教養を学ぶもの、一生にわたって人間や文化に関心を持ち続ける力と、原典を読む力です。そして「変わらないものは何か」「変わったものは何か」、人間の本質に迫る力だと考えています。

（構成／福永文子）